

◆◇◆ フェゴ人の舟、パブロフの犬 ◆◇◆

厚生労働省が、主たる対策を高齢化から少子化に転換すると明言してから久しい。

この4月から後期高齢者医療制度が始まったが、その内容を見れば確かに高齢化対策は二の次になったとって過言ではない。

巨額の財政赤字の問題、確実に到来する人口減少社会。個人から見れば余りにも掛け離れた話で、それを測る尺度を持っていなければ、各々が危機感を有しないのも当然である。

隔離された世界でカヌー文明を営んでいたフェゴ人は、マゼランの探検隊が上陸した時、湾内に碇泊する巨船を見ることができなかったという。やがて『ダーウィンの航海で、フェゴ人は小船には驚嘆したのに、眼前に停泊している大艦船には何ら注意を向けなかった（※1）』ことが分かった。自分達が持つ概念を遥かに超越するものは感じるできないのだ。

情報を持つ側、命令を下す側は、大きな船となって現れるが、私達が理解できるのは到達する小船の方である。

いったい何が起こったのか。水平線にある巨大な船は、いまだ全容が明らかにはなっていない。

我が国の高齢者は「持てる世代」との表現もあり、1400兆円に及ぶ個人金融資産の可也の部分をおさめるといわれる。

しかしながら総務省統計局の資料（※2）を見れば、高齢者世帯で最も多く分布している階級は、貯蓄額400～600万円未満である。更に高齢無職世帯の家計簿は約3万6千円の赤字で、これが貯蓄の取り崩しで賄われている。また我が国の65歳以上人口に占める就業者の割合は19.7%で、欧米の水準を遥かに超えていることも示されている。

すなわち我が国の高齢者は、一概に恵まれているとはいえないし、遊んでいるわけでもないのだ。

さて、該当する本人が知らぬままに制度が始まり、その批判を避けるために後期高齢者医療制度は、長寿医療制度とその名称を変更するとの話を聞き及んだ。負担据え置きに次ぐ朝令暮改。何が何やら本質がいつそう見えなくなってくる。

パブロフの犬の話は、誰しもが知っているであろう——『パブロフの古典的研究では、犬はまず円ないしほとんど円に近い楕円を、直後にやってくる食物の記号として、また平たい楕円を食物なしの記号として受容するよう訓練される（※3）』しかし『繰り返し中間的な形を見せられると、その行動には深刻な変化が生じたのである。犬は狂暴になり、怒って緊張を示し、噛み付いたのだ。（※4）』

断るまでもないが、我が国民は未開人でもなければ、犬でもない。しかし理解できるこ

とから危機感を共有し、限度を越えれば嘔み付くことだって必要なのではないか。

今後いっそうに高齢化が進むというのは、いずれ高齢者になる人達も、自分がその立場に置かれた時のことを考えねばならないことを示す。

いつまでも言われるがまま、為されるがままで良いのであろうか。

哲学、神学の巨星スピノザ（1632－1677年）は、著書「国家論」の中で次のように述べている——『その臣民があたかも獣のように導かれてただ隷属することしか知らない国家は、国家というよりは曠野と呼ばれてしかるべきである。（※5）』

（※1）【個人的知識／マイケル・ポラニー著 長尾史郎訳（ハーベスト社 1985年）】 P.274
－275

（※2）総務省統計局 ー統計でわかるわが町わが社会ー II 高齢者の暮らし

（※3）【個人的知識／マイケル・ポラニー著 長尾史郎訳（ハーベスト社 1985年）】 P.346

（※4）【個人的知識／マイケル・ポラニー著 長尾史郎訳（ハーベスト社 1985年）】 P.347

（※5）【スピノザ 国家論／畠中尚志訳（岩波文庫 1995年 第17刷）】 P.59

April 6, 2008 / 夜間飛行 wrote